成形圖說

五穀部

十六

145
30
1

東京圖書館

和書門	農書類	一四五	函	一五	架	一一〇	號	一九	冊	三〇

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1

ガラス使用

成形圖說卷之十六

目錄

粳（ウルシネ）
附早中晩（ソヘタリオクレヲナラフ）
糉（モチコメ）
附粢餅（モチヒ）
陸稻（ハタケイネ）
籼（アカコメ）
稬孫（トウチイネ）
穭（オロシヒエ）

TOKIO LIBRARY
東京書籍館藏書
明治五年創立
FOUNDED BY MOMBUSHO
明治八年文部省交付

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

成形圖說卷之十六

五穀部粳類

宇流志禰書紀○延喜式ニハ米の一字ヒ宇流志禰ト訓めり蓋古ハ稲米の泛称なり

宇流與禰按ニ禾ヒ志称ヒいふ米ヲ与称ヒくりなり

志良介米新撰字鏡 真稲（ママ）

真米 志夜久乃米蓋字鏡ニ謂志良介米の訛也白ヒ志夜久ヒ云ハ馬の毛色ニもいふ言ニて紛泪なり

粳和名鈔引本艸粳米一名籼米籼音比ヒ

粳あり今按字書籼の字ふし古文なり

四民月令作稬稲ニ○天工開物云稲種水ニ黏者禾ニ曰秔米ト曰粳ト志うるちト

稲紀 秔音庚即粳字或作稉ニ

蕃名レイスト

小師古

うるとふ穫あり延喜式ゟ穫の字を書せり志称ハ年稲
の節なるより年ハ穀の名なるよと時節の所まくもし
くみえて是此等の米の中ふても殊ゟなりて穫いもの
一說は閏稲せ是米のうるちある凡種の巻
著あれバいふりて光間あるをさして名つく
米と糯米ゟ較みるに種ハ稍光澤ある是此等の八即人の
常る糧とし食ふ所の米なり是中ふて早中晩の三種あ
是夫和漢土地を異ふし米性の美悪遍るかそしかるまて
とふへとも是種穫の時節わ大かるもさゟまて八益善
天の固うある所なり但南ハ宮熱に偏ものは早晩同然
同して濃へうる須况や是名品りゟては一國の中一郷

の省ふして各地の俗間「ウルチ」或ハ旧稲みて数十
名又ハ形状ヤ和分ヨ毫厘の差ありてしヌ又稲種ハ時く
ヨ流行するものと棄れハその二四年は成実よろしと
て種易して作るものなれハ
の分ヨ故ヨ強く四方の俗稲ヲ挙るヨ及ヒ他日
究ておのしから知るものあるへし
名あるおとそれらの名所の称呼数百田令ニ曰凡官
ときらく討ヨ尋ふきヨ作るへし
田應役丁之處毎年宮内省預進米来年所種色目及町段
多少依式料功申官支配義解謂色目者稲白黒之
えらる最尚しヌ後の考に補
字書ヨ稲又稉稲烏稜
赤穆白糜もと皆稲の

稲の名ヲ挙るあるヨ今姑緒ヌ作る所稲名亦多し○和
名鈔引唐韻糯青稲白米也賓白稲ヲ
土記穠穀之紫莖穂稲之有青稜米皆青白者也又衣注觀
殊俗云河内青稲新成白稗ヲ殺ヲ淵鑑類函ヨ
和世萬葉集歌ヨ
稲あらうに
早稲東國第一の畢題
ふ
ヨ
早手
早稲本州○時珍云六
七月收者あり
農
書
穆稲農政全書櫃田淺
浸處宜種黄穆稲
早稲幾暇格物論○聞書
云春種夏熟ヲ曰早稲
早代五材集○志呂
ハ世ヨ通ふ
早禾

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

蕃名　フルーグ・レイピゲ・レイスト

和ハ早稲ヨリ波ト和ト通ヲ以テ名ヲ接ス早稲ハ若稲（ワカシネ）ヨリ苗ヲ長ズルヲ以テ名ヲ苗（ナエ）ヲ長ズルハ世ト称（ナ）ス晩稲（オソシネ）ヲ以テ名ヲ稲（シネ）ヲ長ズルハ世ト称ス故ニ和世ト称ス早稲ハ若年（ワカトシ）ニシテ中稲ハ中年ヨリ晩（オソ）ク老成（オトナシキ）ガ如シ凡万葉ニ早稲田（ワサメ）ノ穂（ホ）ノ名多クヲ見ル早稲ハ老成ガ如シ凡万葉ニ早稲田（ワサメ）ノ穂（ホ）ノ名多クヲ見ル

ゆゑ事記傳ニ曰和佐トハ称稲ヲ総テ和世ヲ

ヒニ連ネ言ヒ又万葉ニ葛飾早稲（ワサ）ト

あるは総テ綿菊ヲ称ルヲ稲ヲ称テ云ヒ新嘗（ニヒナヘ）

祭（ニヒナメ）ヲ云ヒ此ノ神ノ御名ヲ以テ云ヒシ大嘗（オホニヘ）ノ

ハ内ヨリ外ヲ宮ト称ス故ニ大嘗ノ宮ハ悠紀ノ国ノ方ノ

當（ニヘ）ヲ以テ悠紀ノ殿トシ次ノ年ハ主基ノ国ノ方ノ當ヲ以テ主基ノ殿トス此ノ故事ニ拠ル

よし和名抄ニ載ル神楽歌ニ早稲田（ワサメ）ノ名アリ今名字ニ早（ワサ）

田ト書又源大府卿集ニ早稲（ワサ）ヲ詠（ヨメ）ルアリ

きもいるものは米の名ヲ以テ宮（ミヤ）ト莊（イホ）ヲ

きうる類ヲ以テ名トスルヲ以テ未詳ナレドモ

のある田うちかへしやげる代ハもみれるを一

記ス播磨ノ宮ヲ以テ所ノ稲ヲ以テ名ヲ

河内ハ早稲ノ中ヲ以テ名ヲ

ヲ以テ名ヲ

いそくを以テ早ヲ以テ皇極紀五月熟稲（ウマシネ）始見（ハジメテアラハル）トイフハ蓋早

稲よりも早く初夏より秋今を盛りと作るもの
今一節早稲（ワセ）ともいふ穂の長く実（ミ）入（イ）りよく一節より高し莖（クキ）よく
即実成る六月半（ナカ）ばより刈（カ）るべし一株より両種とも
実し又撰子稲ともいふものは撰（エラ）び残（ノコ）せる
伊勢早稲　尾張早稲　肥前（ヒゼン）早稲（ワセ）　穂（ホ）長く稈（カラ）米白し　五島（ゴトウ）赤く稈米
よし白　小島（コジマ）稲（イネ）八重（ヤエ）穂（ホ）と称（ショウ）す　英名（エイメイ）姫
しら玉　赤土（アカツチ）乃名（ノナ）を冠（カブ）らする　又越中（エッチュウ）子稲（コイネ）あり　是（コレ）亦
両の種（タネ）なり　房前（フササキ）　穂（ホ）　苞（ツトミ）　熊谷（クマガヤ）
湯田（ユダ）　笑楽（エラク）　吾侍受（アレタノミ）　葉隠（ハカクレ）
楊柳（ヤナギ）　根乳（ネチ）　葉溜（ハダマリ）大早稲（オオワセ）あるこの名（ナ）
有（アル）ごとくなるしかる

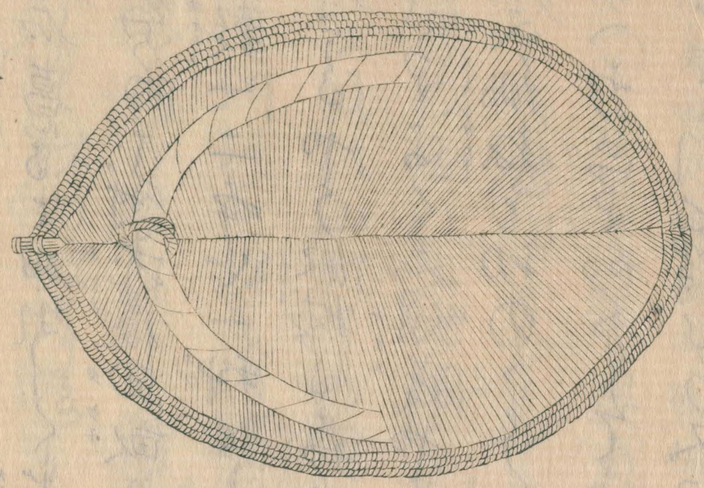
しら玉稲八種子を一昼夜より廿日ばかり
てれば芽（メ）ナ日ばかりにもなりぬるをまた
里（サト）灌（ソソ）ぎ過（スゴ）ぎざるやうに芽（メ）を出（ダ）さするを
播（マキ）て四月初旬（ハジメ）八苗（ナエ）秧（ナワ）を抜（ヌキ）取（トリ）て分（ワケ）栽（ウエ）
穫（カリ）収（オサ）むるの形（カタチ）状（ヨウ）味（アジワイ）美（ビ）し蓋（ケダ）稲（シ）ハ
好（ヨ）ごぞ玉稲八種（シュ）より初（ハジメ）て撰（エラ）び採（ナレル）成（ナル）もの
我藩の南島雪降（フ）を霜（シモ）隠（カク）ざる地（チ）大（オオ）
八浅（アサ）甦（ヨミガエ）ぬ是（コレ）新（シン）の玉稲（タマイネ）ハ
肥前（ヒゼン）より頻（シキリ）に天工開物（テンコウカイブツ）謂（イハ）其（ソノ）季播（キハ）種（シュ）仲夏（チュウカ）即（スナハチ）収（オサム）者（モノ）ハ
則（スナハチ）廣南（カンナン）之地無霜雪（シモユキナキ）故（ユエ）也（ナリ）とぞ
衍陽雑

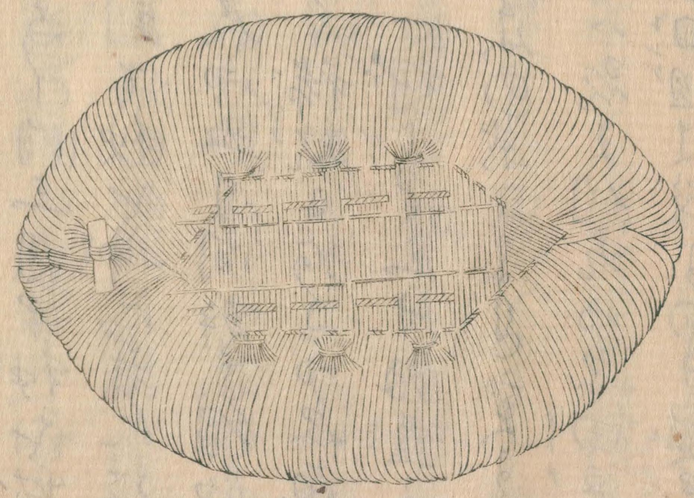
国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

天子御灶(オミカマド)儀圖

始めよとハ南都春日の社家米七升一足と紙四帖とを

稲穂一筋
表裏取合
之を
絞よ
て括
ひり
細き
稲縄
をも
て綰
む





裏ハ皮殻ぬ程なる麻のより絞をてからめ

鼻緒ハ常の灶履并ニ模様ハ白奉書紙まて鼻緒の紙と紙をもつてつゝむ

録と閲(ケミ)み朝鮮早稲の種数(スウ)ふを載(ノ)ると雖ハ極(キハ)めて寒土(カンド)なれとも心を留(トド)て土(ツチ)を耕(タガヤ)し水(ミヅ)の多(オホ)く灌(ソヽ)ぐ事(コト)を要(エウ)し其(ソノ)外(ホカ)の肥(コヘ)ハ家(イヘ)ごと七八月の間(アヒダ)より刈(カリ)集(アツ)めおき遅(オソ)く移(ウツ)すを良(ヨシ)とす

穀(モミ)の熟(ジユク)するを待(マチ)て大(オホ)に渋(シブ)を絞(シボ)りて其(ソノ)籾(モミ)を浸(ヒタ)し芽(メ)を出(イダ)さしめ其(ソノ)氏(シ)と為(ナス)る所(トコロ)の国(クニ)ぞ麦(ムギ)を播(マ)く頃(コロ)ハ稚陽(ワカヒ)の候(コウ)を考(カンガ)へ東(ヒガシ)陸(ミチノク)ハ稚陽の候(コウ)ハ寒(サム)くて出(イデ)ざるもの多(オホ)きを以(モツ)てなり

稲(イネ)と播(マ)き麦(ムギ)を収(オサ)めて後(ノチ)ハ寒(カン)を冒(オカ)して耕(タガヤ)し起(オコ)して日(ヒ)に曝(サラ)し土(ツチ)の膏沢(アブラケ)を去(サ)ること数(カズ)回(カイ)なれハ来春(ライシユン)草(クサ)を断(タチ)て土の膏澤とも為(ナ)るなり

ハいつよ及ぞ本(モト)より菜蔬(サイソ)或ハ麻(アサ)苧(チヨ)菁(カブラ)渚芥(ナヽ)とも播(マ)ぐべし

へおけを土と反ぜおと教過して春月揚戸(ツキノ)蚊帳(カバ)嫩葉(イダス)を芽を候て石蒿(カンキ)ると切れしく莖(カ)を三月中秋(タネ)を植(ヒイ)て栽(ウエ)
うるせりて村老(オトナ)農田(タウチ)畝(オホムネ)を耕(サク)て一科(カブ)そし二尺四寸間許を根深く土
よ入さるやうに栽(ウエ)るあり株(カブ)の根(ネ)
日あるをよく灌茂(サカエ)やをく一科(カブ)より二十餘莖(モト)より頃(コロ)
そを又鋤転(スキカヘ)して初のごとく莖(クキ)
田地へおもかくして七月
おしてそれを深なり又日を田(タ)
八斗又蔭茜(アカネ)の年税(ヲサメ)あり株(カブ)
一科二本(ホン)

て苅(カ)るの間(アヒダ)採(トル)るものハ
皇(崔)寔(カ)四民月令(ニ)云三月可(ヘシ)種(ウヘ)粳(ウルチ)
稲(美田欲(ホッス)稀(ト)薄田欲(ホッス)稠(ト)即(ハ)是(コレ)耳(ノミ)
しきのごとくして奥(オク)氣(イキ)
收穫(トリアゲ)より磨(スリコロ)
土(ツチ)のよハ土地(トチ)潤(ウルホ)
と施(ホドコ)なれ山(ヤマ)
入(イレ)て水(ミヅ)を拌(カキマゼ)その濁(ニゴ)
再(フタタビ)熏(クスベ)
に投して秋の彼岸(ヒガン)より
ほ(ハヤ)い造(ツクリ)と云農業全書田早稲(ワセ)ハ苗代(ナハシロ)
成形圖說卷之十六
八

月の中に淺いそうと云ふ物の日乳をゆて成熟(ハリテクル)の證(シルシ)
あり悪うして実小(ミヒ)さく子(ネ)多く秈(ヒエ)なるを稲の實のり劣て
よろし綾貫行よ早稲の莖ハ長く稈(クキ)多く味甘く臭(ニホヒ)
しき地上の氣とうけて一概(オホムネ)よ生(オヒ)ずみよう遅稲ハ
莖長(カラタケ)く稈(クキ)多く味淡(アハ)き地上の氣よ遠てまさ
あらざれども寒(カンヒ)東北の掲(カカ)げてもよろし遅稲の耘(クサ)
しそくよハ不通の行(ユク)なる(ヒ)の廉(カド)お尾花鄉(ヲバナガウ)とよ
禁中に八朔(ハッサク)お稲の黒焼と称(ナヅ)くるをよろこぶハ
庭苑(ニハ)を黒焼やうれしきようかく称(ナヅ)くるか
中手(ナカテ)字類鈔○藻塩草
中田の稲とよ　中手(ナカテ)稲夫木集吾まる中ての稲
のさはうちむらく稲

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1　ガラス使用

さなえ也　さなへとも敷蓑ともあり
さは中稲なり八月のものなり
早稲

中稲　遅稲　以上本艸綱目時珍云八月収者為遅稲　嘗其先熟故在九月熟者謂之半夏稲　按半夏稲亦中稲の事也周の十月は今の八月なり禮記舍人懸種穜之種二註後種先熟曰穜穜亦作種毛詩黍稷重穜　疏上と同し周禮亦おなし

二番物俗云二番

番名

中手は即中年稲なて手は年の訛なり祝詞式と奥津御年とあるは和名抄に年の志禄と訓て志禄とも稲とも通ふゆゑなり又年稲と書てとしねとよむなとあれとも万葉などにはいねとのみありて年稲とかけるものいまだ見ず

中の稲は二月春分の頃種を撒入てより五十日目八十八夜の節よりも苗を抜て栽付つゝ八月中旬より刈初め又十月よりも熟穀と成る凡中稲の数ある種を通して中晩二品あり晩稲は実を収めて後苗を抜てまた栽付るなり故に収実を遅く秩米ともよむなり

少をすくなしと訓るは非なり

稲は一種取芳氣以供貴人牧實甚少滋益全無不足尚也○本艸蘇頌云香粳長白如玉可充御貢即今の物ある又農政全書よ香子よりの致富全書よ香糯よりとてはなものを米の上等とせり

累児　従あし秔淡紅くまし

饗蔓芒ありし稃米　近江兒芒稃米　畡越芒赤く稃白
ありし白し　米皆白し　田越米皆白し
粳毛芒稃米皆白又赤　黒稲芒稃穂並ニ深黒色ありて
毛と赤芒もあり　ありしも是ハ深白粒最大
あるもあり　米の下茎もあり　西土まで
黒禾烏稲黒稲もあり　いつくにの皆此種也
京白　飯稈　負荷田　毛實
子實一倍　芒無　庭溜　冷毛
亦黄かさ　赤毛稲亦京稲　此俚俗渥
あり　あり
あり乎　秋較芒ありのみ　穎細仲の皆深
し　し　芒あり　義あ

奥手百葉集○祝詞式ニ奥津御年ヲ和名鈔頃
按ニ曰稲熟ニ有早晩一取ニ其名一晩稲於
於志稲和字正濫鈔歌ニもしぬ久天或又悪一ノ有之
のもしぬもよりもしぬ回紀ニもしぬ晩稲の

中ほそて最遅きものをて　遅稲　後
よめよりも抜ニ奥手稲の約ニ
稲　田床　味ハ即地もの者ニ
田地ニもよりも晩ニもり
晩稲爾雅翼○本艸時珍云十月収者ヲ為ニ晩稲一又云諸本艸
獨以ニ晩稲一為ニ種者一非ニ矣今按ニ吾邦古の叫ニ凡稲
の名ニ奥手一ともて晩稲の事ニ
ものもぐゆものさらバ彼土の
て晩稲の事を種ニのをやをもて
もの故ニしハ古もの銭国みやこ
東壁專以ニ稚一為ニ稲一殆ト泥ニ穫一稲ヲ
之注ニ乎晩一稲未ニ必盡一是ニ稚一也　種禮記種穜之種註ニ先種後
稙内則註ニ稙音酇熟而穫ヲ曰ニ稙一種ヲ詩疏ニ種ヲ作ニ童一註同
也過ニ此間の俗謂ニ去ニ来ニ刈一也宜ニ○正字通云即今晩稲
もぐ　晩米　木艸　晩禾　説文
し　必讀　く穂の字ニ照し考

番名　ラート・レイピゲ・イストロ

奥手ハ即奥年もり奥ハ後ニ通ニもの年

鰛子　大堂　石堂　大實延亦小實

小節　双無　小塩蔓　霜破　白笑　四十床反　佐安

香寄　十節　十節もも早て稍

音禾　もとの俗稱あ

晩稲田ハ刈殘て露ほすべしそゆめる

が刈ざる日ハ淺くる宜よい人の風

懶をつい甲斐なくぞおもほゆ玉苗のまくらて田面

のまことおそれくるも脳ハ心よくいさぶよし植くる

稲のおくれるハ姑新あるうそくれのものは

びしさもなまるらくる冷も

早稲　晩稲　先種後熟あり中

中旬よりして小苗をこまお月六月まてよ植るやう

十月十一月よりおりうて刈るほして又打ふの溪

田あとのい十二月次あつめほすのかくほすよい

毛迄も硬く猪猴もの物つくなるぶるものとう

ふり中旬まては赤実ともと上等とやる芒赤

く稗渡江く茎白しも作　白京　又青白

京坂ともり　楊児　海馬毛

まは鳥鴨降居てかゆきうくゆきみはうらひ耕地あらむ
らさらハ去年の緑にあひろうら法ハいひとめでたし節
よりまハ近きを求めうやと年撫の穿てへ長宗多くは
むらの地ようし天雞日本の住居人ハかく佗時節をまは
よく袖せ度はしくおもそるれ壬生忠岑が歌に山田を
味秋の刈穂におくる霜ハいなおほせ鳥の洞なるらん是
よ既て又たつる兎きもしと詞も晩稲ハ実いりと味もよく
ももされとも早中の刈取りて立とのあれど鳥なきの
栖家となりなる鳥飼部て小使が黒鳥捕ぬるをなどに
その田ある刈をねしいむ後して鳥捕れましては稲の莖

蹊にのこしぬるゆゑに田主ハいいと逐惑わるる和きは未
のよきとふあらなかるも立て相戒て田鳥飼ともが明
年も刈鄙恵なとり刈さじと今まなあり字裏は八敢や
めて此うなともえもく早中はのりを稱るぶなら地
方の声ハかく法事とも心を尽すき事さゝうし○案に
稲ハ春種下して夏抜揷秋実熟て冬浅麹ゑまは四の時
を度て陰陽を經て其を終始ぬるとのみして其性おのれ
つら人口に適ふて実に天地谷の法をうるつの美み猶な
里故に稲の良きのハ晩種またくはなくらふよしくの時
稲の大名に奥津御年と和するとかく法わるあさうし農書

云地土高下燥溼不同而同ニ於生物ニ生物之性雖同而所生之物有宜有不宜爲土性雖有宜不宜人力亦有至不至人力之至亦或可以回天況地乎宋太宗詔江南之民種諸穀江北之民種秔稻眞宗取占城稻種散諸民間是亦大易裁成輔相之左右民之一事今世江南之民皆雜時諸穀江北民亦兼種秔稻昔之秔稻惟秋一收今又有旱禾鳥口帝之功利及民遠矣ところは是宜ヨ今日の急を救ふの一助の利を資の術とならんことを凡土宜を察し天地の宜を稽天人を參しうんぬん綜ふの實おのおのいふところ人力と天の術を我しかづして地の勢の就ハ重遠ふ

ふ我迂濶ふて忘ふるべからざる事ハ迎ふ文孫の須ゐて甘藷と蕃薯ヨ擅ふるより西南の地ハ山野肥磽ふく播殖して百蚘ふ今日のごとくふるハふしぎるまでも稻米の世ヨ贏羨ふまゝハ仍事ぜ甘藷のごときハ其種ヨ易簡して水田の作苦ふつゝ旦旱潦風害ヨ罹るの患ふまゝにふる稻種の耕耘ハ大やう村落生ずるふとゝもハ又稻ハ不熟ふとも當年ハ凡むり甘藷の歉ふとゝもハ一方よりの救ひ仍種ぐるまでを行ふぐ

よゝ文ハ乃ものゝおふくなる時ハ仍て飢を

ものあるときわ一方よりわれ一方の
しきるくいるれば漢籍を浮屠書とつくるごとく痘瘡ま
ち倩傭ち井蒂をも烟草とせるたぐひ
よよしとまた彼をいひよさことと蔚ゐる勿為禍先
為福始亦不可為矣禍先誠不可為矣福始
ほ紂の事とむりてもよきいはまじ宋太宗真宗お
その占城稲を獲ることわ氏の第一とやをもその
さるしきよてわ凡粳稲の春秋を度て滋登ある邑此
方水土わ迅のいとゝて就中晩稲ぞ実よく味もぐれ
るいふし我の沖縄わ大寒よ種撒て四五月わも獲

収むまよう新方へ遷き海邑ハ六月よ穫そうまよう
まち新方へうつき黄枚邑ハ七八月よからそ遅よ新
方へもりてハ十月のまよもいれ後るゝいぞ約一月おそくれ
て秕物を相免ハちづまよわれ着ぞかし天地の気化第
ざるものはいうおど人力とを受せるそとも粗或偏て
粒重を叶ま理あり三四月よ下れまも南邑の稲ハと
うよりも方よてもよ稲ハ皆晩熟て味淳くまあづら西
土蕃地の稲米のおそしいまて井化ハ者生、時節と違へ
ぞ天性よ以ぐ俺ともうざうハ時気おまと安きもうと

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1　ガラス使用

去て一思ひに我ものとせんぞと農業に勤むるおのれ
が餘ふるゝ利を知ものは卽て德を失ふことを多し
元耶律楚材毋(ヅヨニイフオコスハ)言興(ニ)一利(ヲ)不若除(ノゾクニ)一害(ヲ)生(ニ)一事(ヲ)不若減(ニ)一事(ヲ)
と此の謂なり

餅米(モチコメ) 新撰字鏡

餅乃米 和名鈔 毛知志禰 餅稲なり

稬 音煖 俗作糯糯(ニ)○和名鈔引(ニ)餐頡篇(ヲ)糯米(ニ)曰(ク)糯(ハ)
之黏(キ)也○天工開物(ニ)稲種黏者米(ニ)曰(ク)糯(ト)稲也詩(ニ)豐年多(シ)黍(ト)天工
開物(ニ)稲種黏(ル)者禾(ニ)曰(ク)黍(ト)禾稲呂氏春秋○晉書(ニ)陶淵明為(ニ)
子(ノ)誄(ニ)稲種(ヲ)彭澤(ノ)令(ト)公田悉(ク)令(シ)種(ル)秫(ヲ)秫稲(ノ)妻(ニ)
曰(ク)種(ル)秫(ヲ)五十畝(ニ)種(ル)粳(ヲ)○通雅引(ク)三
内則(ヲ)云菽麥黍稷稻粱秫惟所(レ)欲(ス)ル者以(テ)稲(ヲ)與(ヘ)秫(ヲ)秫(ヲ)稲(ヲ)為(シ)糯(ト)

秫 音徒爾雅

○廣韻稬

稲ヲ為レ粳ト粳即秔ニ淵明種レ秫ヲ以取レ酒ヲ是也右此確證可レ以正二本艸之誤一

大師古稲紀

蕃名クークレイスト

毛知トハ黏氣ノアリテ物ヨ附ヤスシ天工開物ニ糯ノ米土ノ如キモノヲ即墐土ノ引粳ガ黏ヲ亦おれしきものハ糯ナリ

又保食ともいつくしいみづ今村名ヨ餅田餓ふるいなし

凡糯ヨ亦早中晩の種あり多くハ中晩の二種あり糯ハ軟ふて粒大なり西州ニて早糯トいふは七月比熟む餉ヨ作ヲて最よし六十日ニて赤早糯あり稲白く米長し白糯微ニ芒あり赤く米白し

佗五十餘種の名品そあ

腰腎深黒の淵月ニ芒あり

笠糯稈ヨ托あり

野餅芒微ニ芒あり

尾張微ニ芒あり

谷渡

漆稲ヨ黏

成形圖說卷之十六

十七

て而糯ハ多芒ありて天晴ヨ白毛微ありて稈ヨ

鰕腹近江子稈黒く白し

目黒稈黒く米白し

穂生芒微し紅米白し

芒微し稈淡く米白し

松毬

岩摩葉稀

岩越頸長身蔭

泥田坪瀬重累

糯米ハ農夫の利あるものなれハ多く作らずして赤石候某家ニ上ゐて風味佳し餅ヨ作りて脚つよしといつても亦粘ることなきやヲ又粘毒の屬好ことハいふまでもなし

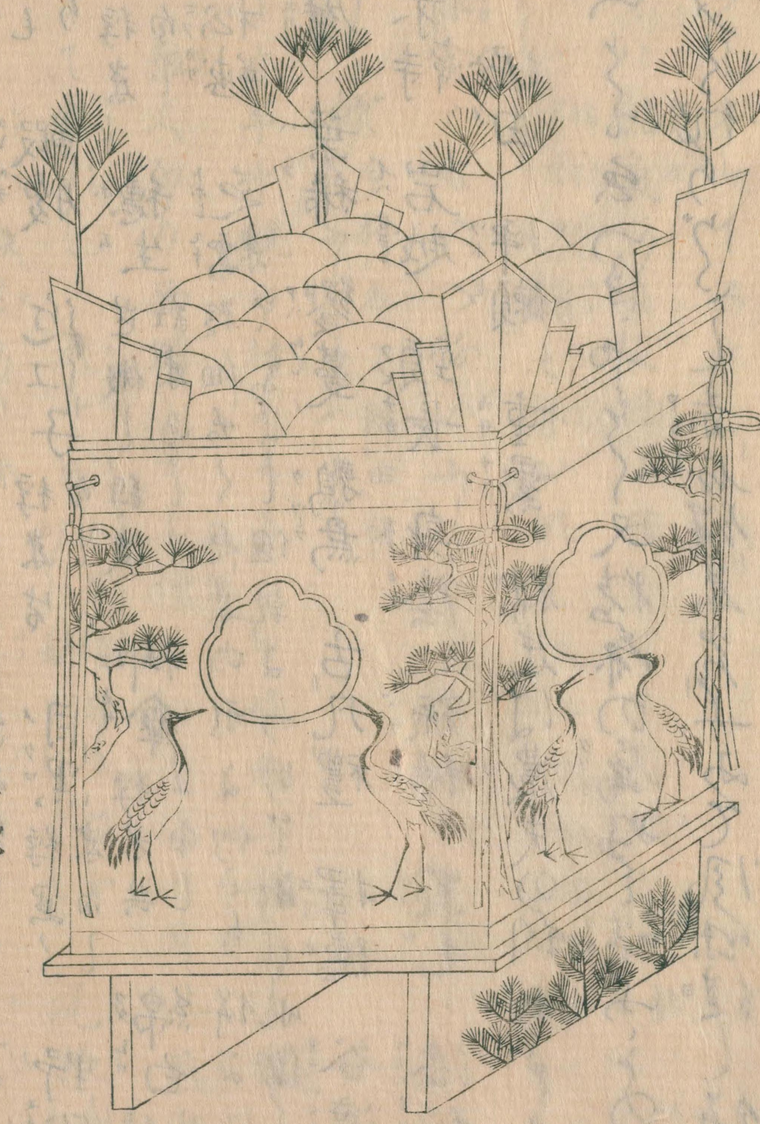
岩摩葉稀　饗蔓　鶉鳥　古凡禮　擇穂

落禾待　岩越　頸長　身蔭　疏稀　蓑毛

泥田　坪瀬　重累　糯

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1　ガラス使用

延喜内匠寮近江國より大嘗會の
ほみ
の屋
かゞみ
のこ
ほさま
たれ
はうね
てそ
えゆる君ゝ子ゝ歌ほ



大伴黒主

糯米ハ當祖神ヨ薦享の粢盛ヨ供給ある字鏡順鈔學て
餅の一字ヨて毛知比と訓ヨ又賦人ヨ歌合ヨそわるや
ほ秋の田の稻ヨもちひわ
今毛知とのこと
米搗迄以豆為粉糕餈上也 爾雅翼云合烝則曰餌餅之則
以為餌表餅言粉 夫正月元旦の禮節ハ 神武天皇の御宇ヨ
始め給ふ事本紀ヨそ
餅ヨ粉ふかとよ 日神磐戸ヨ
毛御象鏡ヨ鑄ヨて祈ゐる再び磐戸明給ひしと
ゐ佳例ヨ依ふて新き春の初ゆうの常晴

次第抄曰歯謂人年齢也歯固者延年固齢也鮮曰稱御節供是守按ㇾ俗所謂節供ハ天朝佳節の供御とらふよ
且由柬也延喜式ㇾ節供の名ㇾ多源氏初春の巻ㇾ
かくめでたきㇾ又枕ㇾ
ちるまとゐ又枕ㇾ譲葉はよろづを延る歯固
の供ふかしてたいためふ柬鑑ㇾ歯固賀ㇾ事あり
歳時記云元日食ㇾ膠牙錫ㇾ取ㇾ膠固
之義とらふも歟ちるわざぬ
ㇾ賀ㇾ陳ㇾ
して深誕ㇾ
ㇾ

天孫奉藩ㇾ竹屋の宮ㇾ
ㇾ天甜酒ㇾ又為ㇾ飯嘗之ㇾ本紀
ㇾ産巣ㇾ通證曰凡皇子

荊楚

十九

ㇾ又ㇾ
ㇾ初春ㇾ
ㇾ月朔日以ㇾ春餅ㇾ為上供ㇾ○對類大全註麥米粉ㇾ又餅ㇾ加知ㇾ
俗成餅形如ㇾ鏡入ㇾ於爐内ㇾ烘熟ㇾ蓋始ㇾ于戰國ㇾ
そいふよと云ㇾ問答ㇾ京ㇾ
この餅ㇾ食ハ物ㇾ
餅ハ本餅ㇾ
神ㇾ
ㇾ
あと書ハ誤字ㇾ

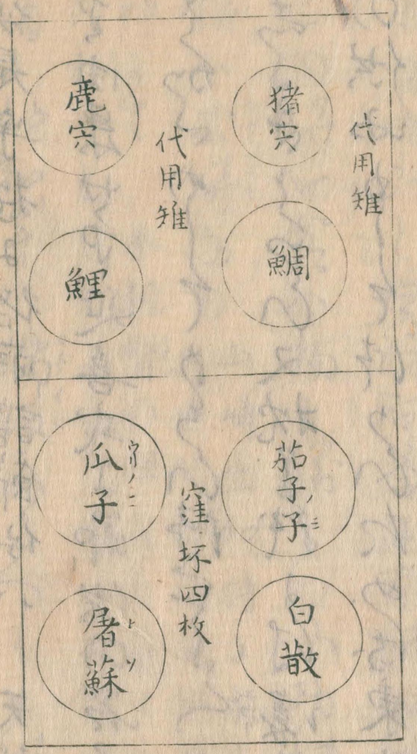
源朝樂事云正

正月歯固餅ハ建武年中行事引ㇾ江

類聚雜要鈔

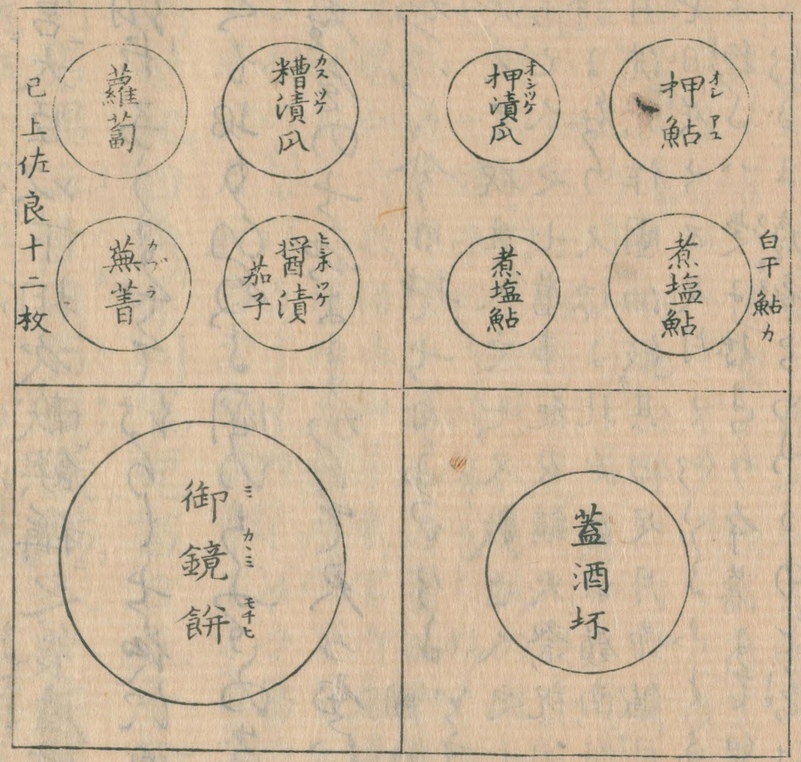
供御脇御齒固六本立 三箇日同前也
御堂盤所供之

近代鯉雉鯛鱸如此盛之



料 但不レ入レ自レ二内膳司一者也

料 但不レ入レ自レ二内膳司一者也



置二鏡餅一上レ物

譲葉一枚 蘿蔔一株

押鮎一隻 三成橘一枚 但近代一成用レ之

御鏡餅三枚 日別一枚 自二蔵人所一出納渡レ之

円居の用度餅ゟ預ざるハ希ゟり

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

誕聖三日夕天皇設宴賜物羣臣七日夕皇后設宴賜物後
宮大臣以下相次献餼稱之養産累式部日記きぬすもの
袴子うませてけらしも初に日のもちゐるものもちゐる
くも始めものする國のもちゐるものもちゐる
産屋の七夜ますかりて天ら雨ふ八百萬代と斬まれ
かしく今日始七日もちゐる 國柱抜よ吾邦七くしの数
ろえて祝生人之七ヲ又数ル亡人之言亡人之七ヲ又抜よ北戸録ニ云嶺南俗家富者婦産三日或足証よりら又抜よ北戸録ニ云嶺南俗家富者婦産三日或足月洗児作團油飯ヲ其曰足月即滿月也と我いみ〳〵養育ヒ日タ足と云足月と仆〳〵おと称ル八是よ抜まり本藩よて兒初てすて生土神よ詣て祈ル事ハ産ノ子ものを白ヲ布ニ裹付ル事ハ本邦ふく色絹まて裹て扇より裕まて襲ねのおと絹ふくを

のや其繍文器裝埀地紋乃三重襲ふ者よ類ハ囲抜よ
吾藩まて産衣と称よ八書紀よ襁褓と字ヲ多須使と
訓まり着乃遺製まや源氏物雲巻よ姫君のたゆき引結
のくるもの つきぞうれしくて又
抱多弥襲ニ記ル抱の紳にたゆき引結
ミのちうおうけふ待ちうけふ待ちうの
背八幼人小神と打まそたちよと云ものを見ル也薬
垣外ニ曰旧例男女共ニ袴の時小神と仆ふ袴を用ル
也一條帝の沖袴着より好ク沖小神を見しめつの襠
八白ういやの役小ういのみれ裏白平絹や三幅熨緒乃度三寸
大暑如ニ打敷治承四年東宮御着袴の時存知乃人ふくて
沙汰ういりて用ゐらゝれぞなゝ云〳〵されハ六百年前既
ゐ襠の製洋ふゝざり 球吾藩の産衣ふ ○百日餅ハ本
る者に其死の当まる事しき事ふゝぶや

朝世紀ニ曰秀才判官兒百日也予食餅とゝり又東鑑頼朝
卿若君五十日百日儀賜人々十字ヲ十字ハ餅の事や晋史ニ
拆佐十字不食とゝり注ニ云何曽位太常蒸餅不ニ
文類聚ふも載ゝり饅頭さゝ ○戴餅ハ

は東山左府記に正月戴餅及五歳まで沙汰しあるなり
古事談安藝守基明嬰兒の時正月戴餅之間少納言入道
祝言才學者祖父文章者如父日次紀曰凡高貴之子弟自
其一歳至三歳有令戴餅之法三度當頂了女婦勤之又曰
鏡餅の小者謂小戴至小者謂星又蓖餅に小豆の煮たる
を少しのせるをいふときこえ 歳時記云民間九月以片餻搭小兒頭上
乳母祝云百事皆高是戴餅と相おれし○清俗紀聞曰清人子生まれて三日或は五日目に妻の親まで餅を作り祝
ふる是を湯餅會といふ○正月十五日小豆粥に餅を雑へ食ふことと
枕草紙に十五日はもちかゆのせくまゐる又正月十
五日の赤豆粥を紅調粥と云よし通例書に見えたり
枕草

或又曰十五日に粥の木ひきかくして家のうちの女房な
どのうかゞふを打たれじと用意して常に後を心つかひ去
さるけしきをとうし又枕草子にとりあへる粥杖打つ
くしつく行事まうくひ又おまもりしと用ゐる下細よ
き標中まてを粥杖まて女房をうてバ男子を生れさて
打あらり緒前ちとよハことくしきとあり今ハ粥杖とて
松枝をゑ色よいろとりて色をまて女孩うつ以て八
松葉手にうつ戯男戯あり又枝ある八男茎の形を製へ之
我いつめと見て婦人我うてりむりし粥杖の遺俗な
里されハ世よハ孕婦とて祝ある八一生児息なく
又あくろよ祝をさして果毎に胎をあるを悩るを悩
人として人あるもののまくなくぬ天地の間の人稲まて
遵ふさざるわきまるハ悉
近きあとまてをん掲無し○濯保の事ハ本朝月令年中
行事等にハ見えて濯山文集にもかし八正月廿日なり
しば大献公の負名を強まつりて十一日となりしよ
し記せり濯保供するにいはふに三切るとくつかいひと

忌言とせり日次紀曰具足餅特忌以刀截之故以手鈌之或槌破之是謂鏡開又鈌餅之名自此起鏡餅の本ハ凡軍陳の粮ハ糯米を最上とし糒小豆し餅に作りてかく食ひてとるく飢ゑず遠に齎にも重宝なるゆゑまで持に儲よろしなるは陰附に煨燔バ即食ふべし又片餅抔どいひものと云しより始まる儀なり○廿日正月といふ事ハ今も歳内諸国祝賀の節とし小豆餅或ハ小豆強飯をくのへいたゝきあとなり拾遺記云江東謂正月廿日為天穿日用紅縷繋餅置屋上謂之補天穿○歳時記にハ補天餅とみえ秘笈にも此事あり○新草餅ハ大神宮儀式帳曰三月三日新草餅作奉二所大神宮供奉御饌殿文徳實録に嘉祥二年詑言曰今茲三日不可造餻以無母子也母子ハ今いふ處の這兒のごとく女兒の節句を以這兒をまつるを雛遊と名く艾餻をもて節物とせられしハ新しき鼠麴草の餻にかへしを後ハ艾の餻となりましまや拾遺集三月三日にまてみつゝ三歳乃もちくへといひしいるよしめる藤原実方三月の桃の餅ハくはし煩しゆは沢わるはなきゝ摘る是ぞ当時にいるはあむ採用ゐし此もつて法按に朝鮮賦註云三月三日取嫩艾葉雜秔米粉蒸為糕謂之艾糕彼我の風に倣ふや我彼雛遊の俗は開化紀に比賣那素寐殊の俗に發しまやとのまたとありてその比々奈遊也といへば久しき風

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1　ガラス使用

俗にいひつる是斎宮女御祭らせしに始ませし時よりて始
まれりとも神の法もととまりつるともいふ江家次第曰有常
阿末加津土器撤て其後供二比々奈阿末加津一ハ春雨鈔に
天兒と書なり即天目勝にて鈿女命によりたる故事といふ
つり源氏談曰十に餘りぬる人ハひゝなあそびハ忌侍る者を
花鳥餘情曰るかし方ありき抱いてあそぶの調度日次紀に
上巳雛遊者是贖物の義也て所謂這兒ハ解除の撫物なり
又ひゝな記にハひゝなといふハ少彦名といへ
る名を省るなり少彦名ハ貌躰眇少にましませしかハ
此神を祭るに皆細き器を用ふ蓋解除の遺法也　通典ニ云後漢三月上

巳官民皆潔二于東流水一齋以三月三日曲水會古禊祭也今
相兼爲二百戲之具一彫弄巧飾增損先常　○文昌雜錄云唐歳
時節物三月三日則有二鏤人一後の世に雛遊の具に弄ふ翫具一切の勝
偶に至るまで大きく高く美しくきらびやかなると
競ひ其艾餅ハいろどりを取りわけて糖饌肉餡壺是に
巧を極め珍を揃て客に奢り人に誇るをとしくこの日
のみをもてはやしぬるハ其費ところより多のくらぶるにて
徒に嬰兒の時よりして玩弄たる服含に驕を去し
既に玩むものの媒とするもの令源氏の時十にあまる
もるハ雛遊ハ忌侍ることと又紳書に雛遊ハ、幼より
十三歳まで天癸未至時の事とあるに今ハ女子あまた家

よろこばざらんや老(オヒ)もまたかくのごとくの寿(コトブキ)ものせんいとそぞろし昼遊(ハルコマ)ふく細く腰(コシ)巻(マキ)は草紋(クサモン)をそえいそ三日の夜を清(キヨ)らに明(アケ)ふるくゆうべ客(キヤク)や乳子と暮春浴沂(ヨクキ)風雩(フウウ)のゆかしき其(ソノ)量の一事よかくよろこばざるやうよろこばるる○糰餅(カシハノハナモチ)は五月五日よ糰葉(カシハノハ)をもて粽(チマキ)し節供(セツク)のそなえ物(モノ)とせり○嘉祥(カセウ)は仁明天皇の承和十四年の頃二神の告(ツゲ)ありとて六月十六日八重(ヤヘ)やまき(ヤマキ)もて嘉祥(カセウ)をなしたまいしより年毎(ごと)に行(オコナ)はるるよ

必(カナラ)ずこの菓(クワシ)をくらうあいさつせり○江戸(エド)沙汰(サタ)の後の俗(ソク)ふるき菓(クワシ)し江戸(エド)にても糰餅(カシハモチ)のことをいえり○嘉祥(カセウ)は四季(シキ)共(トモ)に行(オコナ)はるる式(シキ)なり○延喜(エンギ)式曰嘉祥(カセウ)の御祝(オンイハヒ)八奈良(ナラ)の帝(ミカド)の大同(ダイドウ)の頃ちいより年毎(ごと)に又八陽気(ヤウキ)ちかく人の気(キ)もうきたちむずる思(オモ)わるる名少亮(ナショウリヤウ)名園韓神(ソノカラカミ)八疫癘(エキレイ)をさりそぞろせまつるものなりそれ八神(カミ)酒(キ)なるべきものにて天長地久(テンチヤウチキウ)民安楽(タミアンラク)を祈(イノ)らせたまうことなるよ仁明天皇の承和十四年の頃二神の告つげおおせて六月十六日八重やまきもて人の形(カタチ)よへて脳(タマ)をなしたまいしより年毎の事にて今(イマ)八なおして今日の事なり

日次紀曰嘉祥祖禁裏風五色瓷弁諸肴於両土器各
白紙裏之紙有差水引結之頒賜羣臣武家亦用杉原
紙蓋之十六銭求得物之遺意也按世諺問答東見記曾
後嵯峨帝未得位之時宋之嘉定錢十
六文を以食物を買て供佛とせしより此日より幼き
供物を供るを祥達て定の音をと
と学おく重ねるうえ又夏の土王より併と
歳時記曰六月伏日宜作湯餅一食之名曰辟悪又和〇
樂部曰嘉祥樂あり太田麿仁ら豚餼
八政事要畧引延喜蔵人式曰十月初亥日内蔵寮進殿上
男女料餅年中行事秘抄曰朔旦冬至
しめ御衣又令為猪子形以綿裹之挿夜御殿曼四角蜡燈
日記曰尭うういの佛いうなるのこころをつらゝ
尭もる万世をよばゝ山べのこゝそゝきこうつろ

の実も生数よそ〳〵の〳〵百そうの机のをいともまま
つる〳〵しさ〳〵ぞいなやこゝろるしことの志まゝしよ
里同出度事として改えあらて初後とおらるめさせお
もて六月十六日ゝ事いとなませのよくるよを
こし氏安く國平(ママ)なれハ四はもをつゝめて典文おこな
もせもふなるしとそこゝは学名を祀
る事ふしあれハ三日の日のそこ祭とおれ〳〵く嘉和
祥申記曰しし年三月より母子縁あまさがゆるよを六月
より初もしくは遂る後のほともなるしまも 抽筆まて
はかりうゝ綿ふるとゝや実はは納涼舎ふる〳〵そもあ

ふるよそひのあるそし　日次紀曰禁裡亥猪餅賜赤白黒之
伊豫局調進搗餅木臼及木杵今日奉臣有差也女中御下頭
同祝言其就福也而巻餅者數嘗臼下奏楓歌蓋猪者多子
故此日為餅以祈子孫蕃息也凡十月有三亥日則始用小
餈及銀杏忍草中用小餈及楓葉忍草終用小餈及菊花忍草
凡所賜之餅色典侍黒者内侍白者以下赤者又曰翌戌
日攝津職勢加土太夫献餅於皇宮及上皇宮稱之也能
勢餅皆恒例矣○子のこの乃餅の事源氏注
まねるをへうむ三ら一まくをとりてかしらのこ子
のこいくつまねらせそとうたふ又三ら一ハ四ほと
日よ含ふくめる又三ら一ハ四ほと翌と翌日宴日饌と
はもの四の事をもぐかりて三ら一ともいふ史記晋悼夫傳
よ於今三之一也ともと本朝文粋よ於今三之一ともいふ
田三之一ともいふ

月十日在大臣頼忠公一女入内道子十二日子始参上殿
下同参餅四種盛銀盤今ハ元服ふとくとのく合の物
てよも陪膳さものの四季従よ十月亥の子もちいめ
しけるハ十三のもちぬよつまハ十二管てま
つてはるくまるとうるのはよぬれせれ
いしほしいまなとおよびしてうおのくとこ
しらぬ世おとさうるハまふしけるこの足及るも
とも但馬の国もちぬて亥の子夜行とうしよ
と國史よけら世月の儀ともやて書よハ
十月八亥の月みて亥の日用らるあと夜ハみと一年

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1　ガラス使用

の月の数まうみよ八十三うみてめてらくあら海し
きまていみしきまのあれバとておなかまよし仕
る掌中暦よ豆子の俗七種の粉と合て作る七種の粉ハ
大小豆エ豆豆胡麻栗柿麩あら世清岡答よ十月上の亥日
の餅の事ハ内蔵寮より年ごとに献物を風俗の新嘗会のよう
げんてうらいみ〻〻あら是今の十月亥猪の俗節をこ
えうら〇三夜餅ハ中右記寛治五年十一月二日女御入
内之後有三夜餅事件餅民部卿所調進也是高年之人
所役者主上入御帳之後關白殿取之令進〇季子餅ハ臘
月朔日の朝に食ふ祝餅なら故よおの朝を俗月立とい
ふ又川ごぶら餅あご〇枕冊子にくぶとのひろ
きともいあごを物の原いれてとひろきともいふひろきともの者
そのものともといふまもと注や〇柿餅ハ白柿を
着て餅とあるあり 懐朝樂事云正月朔日簀 栢枝於柿餅以大橘承之
凍餅ふぞいふあし又赤豆を擦て着らる餅をぜんさい
餅といふ善哉餅ハて長寿者人皆ハ着衣をおして
寿宴を梅村載筆よ神仁餅と書ぐさよしいつるいおふ
〇或人曰七月中元霊祭の薬を往よ海川よ流し捨ハ
せんふしもべうくは路頭の乞丐よ與うらんそ
信の施餓鬼あらんがし

畠稲（ハタケイネ）

野稲（ノイネ）　岡稲（オカイネ）　旱稲（ヒデリイネ）　岡穂（オカホ）　本朝食鑑○俗ニ陸ヲ呼ノト云ヒ穂ハ稲穂ト云ヒ

陸稲六書故○淵鑑類函ニ稲性宜シ水亦有ニ同類一而陸種者謂之陸稲ト記ニ曰前醸テ加ニ於陸稲上一今謂ヒ之ヲ旱稲ト南方自ニ

六月ニ至ニ九月ニ穫ル北方地寒シテ十月ニ乃穫ル　旱稲齊民要術　旱占農書　占城禾國朝、要録

黒穀米格物論　占稲本艸綱目　畠稲西事珥　米米　黄、秈以上七修

類藁按ニ綱目ニ占城稲ヲ秈ノ一名トシテ又農書及爾雅翼等ヲ考フルニ秈ト占ハ誤ナラン

とろろ

蕃名　アクケル・レイスト

岡稲（ヲカイネ）ハむりノ　皇孫瓊々杵尊（ニニギノミコト）ノ高千穂峯（タカチホノタケ）ニ天降（アモ）リ

ひし时深霧（ミキリ）にぎたつ（ニギタツ）ヽ晦冥（クラクオホヒ）し、我稲穂をとりて（ワガイナホ）お撒（ウチ）まし

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1　ガラス使用

しくは忽に淵明なるまゝ我に
の名はあるもの今其地よ
さと日向風土記に載らる又
るる霧島嶽とよ
ろは国邑折、那よ高千穂、
皇宮所の名ありてその京ゐ平安
を逃域のたゐへて高千
のごまぐ〳〵さて
隅よ係て桓武紀よ霧島のまと
て古の添之峯高千穂峯久士布
別とある久士比
流ハ槵日我引ふる言みて日
ハ槵日我引ふる言みて日
布流ハ槵日向の旧名と豊久士比泥
別とある久士比泥乃
皇宮所の名ありてその京ゐ平安城をやせるよりし因
を逃域のたゐへて高千穂をやせし山嶽の称と
のごまぐ〳〵さて
隅よ係て桓武紀よ霧島のまと
て古の添之峯高千穂峯久士布
流ハ槵日向の旧名と豊久士比泥乃
皇孫尊乃

高千穂峯 神代霊異一枚を存び
新嶽権現社と云即神
体也今山紅に植ハを松よて鏑のごとく
左右に隆出ハ然を天明初池田某
が己を悪夢つゝ偽孕樹し外ぞと占去
此を除去し事のごき云通
西遊記に此偽孕尚在よし著せ
ば弼よ山陵考州に之が辨出しど復茲
皇孫尊乃降臨て邊疆を理
め給ふ事を安しまひ稲穂を
お撒まふとうるハ此を民よ耕種をお導きまひしよし
小てそよも種うるわざ撒ふるうしよそ
ふ事をおて天津陰日御蔭を仕作よまつそてまく嗽く崇
し朝涼雰夕深霧をもへ息よ宥ふる
うだと王澤を被ふ一斑かく
成形圖說卷之十六

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1　ガラス使用

栽られし、陸稲みてその
八歳く稔をいさぎて向生
紀伊牟婁文よみえし呂はその
と雲島稲の名を存しるハ少
今よもて西州の農夫、稲の初穂をさて必霧島神
苗を献ル俗の恒となしまつると所由にてし此
吾邦の陸稲ハよりも始まるぞ按ニ西土のい
みゝへ、皆陸稲なるハ本草時珍云古者惟下種成畦故ニ
祭祀謂テ稲ヲ為嘉蔬ト、陸稲の登ル
ハ汲淖の中ヨ畦をもゝへくさるまてまるくし又詩

周須ヨ豊年多秬とうたふ秬ハ稲利ス下濕ニ須ヨ
していか選よくそうゝをかくるていしハ水田の
稲とふはとそ
此ものゝ形状全く水稲ヨ異ル
穎各あり大ふハ八十八袍の家後ヨ播て八月中旬ヨ
川取とのゝ霧島野稲ハ梗糯共ヨあり芒籾黒く薬
罐ニ長く粳米共ヨ白し四種ハもり攪ハ白米あら
金火いまうしハ赤き薬後と
よ和らえまて薬漬の中より聖稲の
共ヨあるうしよう此同ある
解百合ハ芒長しハ出ス稲と云
飯 西節 日下 秩子 御實子 共ヨ米白し
黒糯ハ芒
共ヨ米白し
吉野 乾
野迩賀稲
私
春宮の種多し

るり苧もく又生實稭てよく
ちり又早乙あり野和のみ縞もの
刈一名占城葉粳大き米白く
粘きあり晩稲ふして洋米もの
月の交よりあらへ白沙まじ
牡翻し粗粗を調合一畝より一升
さおれしく蹴まて畦溝をたて合土
に苅入て土を掩もの一畝
のまけ
くま又撮撒のものはたる一畝
一畝よりまでさる肥土と
一區より撒そらんぐの
ち次と撒くなのまく窪凹あり
よう撒入へし時候の遅速よ作
まる〇し〇地道八寸一畝土
唐芝もく稗を大
もり乙唐そぎ
ものを拵る地八二三
米白く洋米もの
白沙まじ肥そはぜて
苅入るの穂くて苅は麦霍
おれしく蹴まて畦溝をたて合土を畚より入る一掬ひ
ひ一畝を一升うけとえ一升
ぜ土死稗蒔べきよ
塚奇多塚と
一畝より一升を鬱め堆くく
早稲を土地の寒頃
丁寅

名所の縄草をお迫し土もる
灰ともしくるよ萩を一二年もぐ
八地を休め易て作るへし天工開物云土脉堅緊者宜耕
隴墾塊壓薪而燒之埴墳鬆土不宜也或云凡旱稲を作る
地八水田みてハ水多く又畠みてハ濕氣ありてあ
稂をよ宜しくざほみうを搭まて
宜のまけるといふ如きハ真稲よりを搭まて
べきまもり是八農書所謂占城稲云北地水源頗少陸地
沽墜處宜種此稲とある苅一日凡八高仰湾下まる
いもぞ牛刈ずりを撰ぎてハ遂よ取実あるふとなし〇

凡苗二三寸ほども成長る時より植替(クサギリ)て茎(シヒ)かひ一叢十分水を灌(ソヽ)ぎ肥ふれ葉の繁(シケ)り茂て稔ありぞ又旱(ヒデ)やはあを透(ヌキ)ぬ様に修造(テビロキ)り廣邊(ヒロキ)の地いちやうに勤て土和(ヤハラ)ひせよ苗のおはまみ枯(カレ)やうに変(カヘ)ぬ様に穫(カリ)取(トリ)時分の稲の葉の凋(シヲ)れ水を灌(ソヽ)ぎ又よく乾(ヒタ)ぬ時二三日ふかして元根(ネコヽ)をひろく延(ハヒ)らかして肥を用ひて根(ネ)を涼くする事を専(モハラ)とすべし

種麥治地畢豫浸一宿然後打潰(タヽキ)鋤草一次澆糞水一次至於三即秀矣とは此解述(ノベ)たる法(ヤウ)に依(ヨリ)て水旱(ヒデリ)の災(ワザハヒ)を免(マヌカ)るゝ法(ヤウ)なり○凡陸稲と炒法(ヤウ)は炒(イリ)たる種子(タネ)を用(モチヰ)水(ミヅ)に浸(ヒタ)し之を毎(コトニ)朝(アサ)水(ミヅ)を換(カヘ)て漬(ヒタ)すこと凡(オヨソ)三日ばかりにて芽(メ)を出(イダ)すなり

今按(アンズル)に受(ウケ)し農政全書(ノウセイゼンショ)謂(イヘル)種(タネ)旱稲(ヒデリトウ)の法(ヤウ)大率(オホヨソ)如(ゴトク)此(コヽニ)云(イヘ)り

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

赤米（アカゴメ）眠寤集ニ阿伎米ト云ふもの此種ト云ふ
るべし今俗ニ大冬米といへどモ種ハ多の一種なり
○赤米ハ暑ク南島の土産（ミヤゲ）ニて此ほか
産（ウム）るゝ所の稲ハ皆多くハ赤紅（アカモ）ある
ものハ乏（マレ）ニて天然（オノヅカラ）なるべし
直安（ヂキヤス）和字彙蓋（ケダシ）稉（ウルチ）ふきを
ハ乏（マレ）きと云ひて食てもきの綫（ホソ）稼（ミノリ）
飼の字を登毛々々志と訓（ヨム）ハ一説なれど
ゝと乏（マレ）ゝれど
の俗言なるべし

赤穫（アカモチ）字典紅稲也

山音仙或作籼（シン）秈（シン）○涌雅翼一種旦稻（ヒタウ）比於粳（ウルチ）米小而尤
禾黏其種甚早今人蹏（ヒヅメ）籼（シン）為早稻○揚氏方言江南呼粳（ウルチ）
為籼（シン）○本艸時珍云籼亦粳屬之先熟而鮮
明（あざやか）者品類亦多有赤白二色與粳大同小異

菊花籼（シン）通雅七八

ゝその赤白二種（フタトホリ）のりといへども俗通ニて赤米赤物と
唱（トナ）ふるを正しく他邦ニハ稀（スクナキ）少なる豊農政全書ニ云粳之小者謂
之籼其粒細長而白味甘而香九月而熟是謂稻之上品曰
箭子其粒大而芒紅皮赤五月而種九月而熟謂之紅蓮其
粒尖色紅而性硬四月而種七月而熟曰金城稻是高仰之
所種松江謂之赤米乃穀之下品湖州錄云師姑秔言其無
芒也四明謂之矮白其粒赤而稃（モミガラ）白呼為陸（オカ）籼（ボシ）稻とゝゑ
ゝる旦農政全書ニ所謂粒細長而白味甘而香とゝゐ又

留青日札ニ云稬（ナウ）

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1　ガラス使用

倣烝米圖

授時通考ニ云白秈一小秈玉斑秈齊頭白六月白などいふ
もの疑ハ白色米なる欤又金城稲のことき、赤色米なら
るへし按ニ登凡志の凡志ハ蒸といふ語の訛なるへし此
との粳稲の搗ニ米をまいらせちらし煮蒸て米となすて
よりいふニ蒸米といふ又按ニ登ハ焼と通つ俗ニ
物を煮とたきたくといふ登凡志ハ即焼蒸なるとあれ多と登
火をとるやをとはど同蒸ざるをは乾磨といふ此をの蒸
ぼさるもいふなるど
ずして磨搗ときハ穀の形ニまろび米粒多く碎れて
耗ること早く蛀も忽必蒸磨ニをまつると其蒸たるの工
夫費がゆゑニ前蛙多く乾磨ニ他まるを如此なるハ上入

の時生熟とくさく納るもの 今俗ノ唐千ねび 又舶来
の種子唐そおし赤そばしそういふ 知ざるの大冬米やきうほを云 其
て統て大唐米そし唐米そうみてよ城稲と混淆ものを選し
のは擇ざるのもの きもの大唐米ハ大冬米の混ずるもの
南産志引閩中記云秋種冬熟曰晩稲歳一熟者曰大冬本
州時珍云秈以秫而粒少始自閩人得種於占城國其熟最
早六七月可收今多舶来ものいうも大冬米一
二種よりそは歳葉長き稲を岡種ものらず稞常の又一種唐
ノ名ありそものはき葉茎ハいとく長大みて実多し

凡て野稲よりくさの
ものの水陸二種あり 陸稲ハお 係よ記もの又粳米と一類ありて米
赤きものと紅玉ノ云生穀並よ常稲よ彷彿ありは生
芒頴極て赤き 按和名鈔引廣志ノ赤穎稲ありこの類ありの又粳
米稲蝉鳴稲等の名ありと其白米稲ハ赤穎稲ハ赤米ありの廣志虎掌稲紫芝稲白
芒頴ありの等ノ名ありきに対へい農人ハそのを
く最柔軟ノて生粒小くもしありの又粳米ハ生粒細く短
のも稍く軟ありの又赤白両種の里向ハ又黒
く粳米そもに白し或ハ粳ハ淡紅ふして米のと白きと有
里并よ之を白毫米と云 凡乾舂と悪舂ありの穀

磨ら穀をお落やうまく磨ひて
よく裏ゐを漬し能ふて蒸て移せ
ちごみく其性味別条大よ変ら〇此
糠の種旋ひら三月中苗代よ前つ
節ハ常稲よ異ゐて〇性をのハ
防癆土乃淳田ゐよ植るものゐれハ四月の後条よ浸
種十よハみまてハ苗代をかゞ
をゐを前つくるものを耕て莅いる
しく既よ種撒ゐんとする前ひうるよろしの田土を干
乾し湫土ゐ肥或ハ馬糞を晒しいと細やうにかき砕き

籾のごとくして白沙よ種子を揉ますやうこと裏栗うく
るよひとし〇凡田一畝よハ種子一升の積みて畚の
ごとき器よ入て三把一撮ふして去寸皆仲よ撒つ条
ゐら又長手の唐鍬ゐて盛て双のゐをとく移を撮ミ三
尺ばどおさまく投撒よするよ概ね均しく基の枠
の整るがごとく前呼るひのそゐを敏ゐるをもよ堤
をつゝて擲栗うぶし是ら農夫ゐ熟のわざゐり〇
早稲ハ毛実とつゝものゐれふし三月中に苅呼七月初よ
收ひぐるなるよ赤ばしふらい一名赤ばしふらい白
そくふく粳米共中稲ゐら
そくふ墨大冬の跳ゐるら是ら選集の種ゐら又横川米

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1　ガラス使用

ゐる梶山なとにあり　晩秈ハ大さはしるも云　芒あく粰
足
米甚に○大稲秈ハ南海球美島に生る赤米にして粒
赤し
亮太し味ふるくもりけるの瘠田にうくるによろしく
厚地に蒔るときハ反てよのり河しくそもく天生の異
種なり○糯秈ハ晩稲多し　芒あれとも短く粒ちし○糯秈に梅子と
いふものあり精てハ米粒赤く餅に做してハ香気高し
しとて珍品とやりけるの本南島の中米國の産なり此品
米元れよろしきも名の質ざるとも いちよろし
此よの稈莖穂房亮朧がゆゑに颶風なと吹ハこぼれて実
殞僫ふして一粒とも細るきあと乏しなに刈乾すと二
日許も經く稲架にて築発にかけるものを砧にし奴手
に莖本を把て打敲ハもろく落るも小麦とおれしの穀
まて穀殼磨くるを乾磨といふ以て炊て硬しとなく
そも白秈ハ粳米に常し次但冷飯ハ堅く粔籹のなとく
強断を傷めし又酢及焼酎に造るに常稲に相おなし○
蒸磨とハ穀を川水に漬おと一七日許泉の流るき所ハ
くぢめて漬なり泥沼へ漬るのハ色つきハ宜しとなく池或ハ溝田を掘
ことを仮に作りて泥奥あり又大川なとに漬置ときハ鯉
鮒好ミ集て須臾の間一吉らして莚にひろげ二三日許
俵計を錯にあると
打ちあげて大瓶にへて烹調るなり蒸気の臭あると度
こし經くて取出し又二三日だかふとおしほげ又二三日

を入れ臼に入て磨て稃をさらひて急に米少許りと
炒んと欲するときハ穂ながら足にて蹈落し鍋釜にて煮沸か
し筵に攤げ曝して搗むるを煮糯といふなり凡て蒸米
の中白蒸ハ其形さらしかはらで稍上膳にも供ふべし或ハ
蕎麪乃饅頭に代ふるに足れり惣て蒸米ハ性素脆て絶
て粘氣なく摶飯にならず炊てハ殖盛なれども秈
二梲ハ種一梲にもおよばず因て力を役ふ傚工ものゝ為
とはならで飢て憊やすきを嫌へり但瞬落の輩稍食ふま
壊へり今醫家にて赤秈をとて陳倉米の用に使ふもの
あり夫ハ稽稲をとりて取用られ○凡乾磨になさるハ

白秈此がハ何れも精好ならしも赤色除ず而に蒸米ハ能
鑿ぎれバ赤皺剥去て白米に異なることなけれども其下等
なるハ播にづりけん○長崎聞見録曰唐土の葉ハ膏澤
なく折易くて縄になしがたく久しく保ちがたし其穀
の葉膏潤なき故にて是れハ此方なるへきすや唐人此地
の藁の潤沢にして縄になりても壮く調法なるを
見て其稲欲がりし此まても西土の種米ハ此方の秈
に擬ふべきを志向へしたるに我人ハ美しき稲を絶
まて喫なれて秈などハ人中に瑣なと羞かせるハ自ら
なるのつりぬれど或ひとの書けることの太宗の化を

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

偸(ヌス)める者ハ武士さへ短兵長笠のまゝ詰ある業を懶(モノウシ)とし遊藝を迫き術を学ぶをおゆひ見ハ出家頭陀まて梵嫂と抱持て臥さゝいつゝぬハ淺ましき事ハ廣地あれハ小説くの注還さへ斯方のやまひ信ありその人おそまて盜賊不義のやう頼ハ又斯方の十信おそもてるゝ先例常の者と人の物を攘(スス)まぬハ稀かてそれを恥よ物かも次第て攘ましきを決斷と多ハ此一ツ也女の悪風俗ハ推(ヒトリアリ)獨行き女ふさも途中獨行(ヒトリアリ)きをしハそまゝ淫(ケガ)さる因(テ)私事中ま造(ツク)ると鎖卸ふて向の家へ舁(カキ)着て鎖を啓き父事強動みその時ハ等

一ツ女と行付ぬハ盜賊ふハ又女子ハ幼より脚と木綿まて縛(シバリ)めるを歩行と不自由ふして淫奔やぬるもの手上男子がちまて女子少くられハ貧漢ハ終身妻を有(モツ)おとをゆを大抵方通を事とて一生をるゝ古ふ清の代ゟ起りておこより柔弱ある風俗を戒懲てまゝ武藝を学一さし試場まてハ皆ゝ露(メキ)又猪負を投さやると云志られハ吾人の撲大相ゐる業云ハるまし又妻私の食物まて唐稲まは粒労るまし我身の不始さへゐく称ふゐは一生妻ゟ扶ぬゟもゐるましかゝゐは妙地ゟ生出しハ時ゟ取て外の妻ゐもや

稲孫

和名鈔○唐稲孫也尾張ノ
比宇知ト曽ノ称アリ

曽孫ヲ比々古ト云ヒ又杪ノ字湊テ比古衣
新撰字鏡按ニ比古ハ曽
比古波衣 孫ノ義ト比古波由ト
おそらく波衣ハ即生ヒ
ヲ云古言様ノ細枝ナリ此ハ和名鈔
訓ヒたそく其杪小ナルヲトテ
中謂桑楡孽生為蘖禾野生曰旅ト
比古波衣ト訓ヒ和名鈔ニ木蘖亦訓ヲおれしうさ
ノ義ト
ノ如ク小田ノ去年ノ
曽於比稲 和字 引手 蓋比通知ノ
通例 引手ハ奥手ノおそし又北越
て比登手ト云ヒ蓋 冷毛 冷毛
引手ノ訛ナルベシ 澤常ノ
ゾ明年ヨリモ稲存スルモノヲ
政全書云烏口稲色黒而能水与寒又謂之冷水稲之下
品ニシテ後再生
えぞ
梁 日次紀 糗稲
度生こうじ
ハ俗意ナリ
第者称梁不堪用
再稲
又生 沖縄方言帰復生
ノ謂此地ニテ

稲孫 廣雅稲已割而復抽曰稲孫○
四民月令養生要集等亦同
再熟稲 唐書開元十九年揚州奏
再熟稲一千八百頃其粒與常稲無異
再穭 農政全書其已刈而根復發苗再實者謂之再熟稲亦謂之再穭
金洲　白香秫 以上閩書南産志歳再熟者
再生稲 字彙○秩玉篇再生稲也
○秩韻會毛氏云秩本再生稲刈而重出後先相繼故借為秩序字

蕃名 ヘルグルーイエンデレイスト

比通知ハ乾土なり水田乾て後生するとみえたり和名鈔
にハ自生稲の部に收むれども古今集に秋かれる田に
おふるひつちの穂にいでぬハ世を今さらに秋はてぬと
か詠るに據ればひつちハまさしく再生稲也 歌什にひ
ひつち稲ひつちはえなどいふ詞あるを後撰集によみて つち田又
おふる山田のひつち穂ハまたなきねと刈くらふし 又

ひつち田を稂田の字に備まつるハ爾雅稂禾粟之叢生而
不成者謂之董にまかるゝ然ども稂ハ此云犬稗の事にて
秋田にハ再生稲ハ南方の稼なり書紀曰　天武天皇廾
あしぎ
一年秋所遣多禰嶋使人等貢多禰國圖其國去京五千餘
里居筑紫南海中其國粳稲常豊一殖両收云々多禰國ハ
即今の沖縄島なり 沖縄ハ即流求の正名なる後漢書所謂倭奴とハ沖縄の古音也蓋沖津島息
着島なるより出沖縄或中山傳信録にハ屋其惹に作る
今爲恩納嶽恩納間切等あり又流求ハいふし〜多祢國と
いひし所由を按に出雲風土記曰飯石郡多祢郷者所造
天下大神大穴持命與須久奈比古命巡行天下時稲種墮
此處故云種然神亀三年改字多祢とかえし是流球ハいふし
への時に粳稲一殖両收の國なるより美稱て種國とハ
號られたるなるらん出雲多祢郷を今ハ種と
書けるにて其名の相縁を知るべし　先是推古
天皇廾四年掖玖人先後并三十人来之　舒明天皇元年

夏四月遣田部連於掖玖。二年秋九月田部連等至自掖
玖。三年春二月掖玖人帰化といふ。田部ハ田地民戸を掌
の官なり。按田戸定民籍の事舒明紀三十年に出たり。田部連掖玖に在こと約
一年、是時にあたり南島の田地戸数を検校し貢賦の事固
て行はれしなれバ、其三年春二月掖玖人帰化し宴を朝
貢の始とれ所謂掖玖亦その流求なり。事詳に南島志に辨ぜり。凡奄
美島より以南沖縄まてハ九月霜降の節稲田の苗代
をおろして臘月或ハ正月に早苗を植渡す故にうる毎
に稲科の出るへ水芋を挿添なり。是地勢温よく稲の生
られバ滋殖きをとてなるしに春の気を受てより日

日に長茂五月には成熟して刈収に根より五六寸の所
を切刈ばまた孫科より出て再び稲生て秋晩の頃二度刈
となれりの早し　但又生と取しハ来年の穭をとりもといへり　是沖縄に限り
水田稲まてその種子藁なとに八絶てなきことなり
是まて天武紀乃多祢島てふものの即流求なるを知べし
まふなり　今按に凡いにしへ南島をさして掖玖多祢と呼
その八此二島南海に在て最本国に密迩南島
に往者皆経歴の由る路なれハや。然ハ南島人川辺郡七
島を指て土噶喇といふだらし。土噶喇ハ孝徳紀に始
て吐火羅国とみえ、斉明紀にハ観貨邏国とも都貨邏人
ともあらし。或本に堕羅人と注し、又続紀にハ度感島と
河るとのよて後に徳島と称する皆古今厳音の転なり。今
は七島の中に宝島のミを旧音を伝へいふ。七島ハ是徳
島へ往者の海路由る所なれハや。斉明紀注或本堕羅ハ
蓋今七島中の平島なり。此流求を指して多祢とも掖玖

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1　ガラス使用

氣象ゆゑ夜耕田よくて秫稻を植て釀て酒よ造るの了見なり又天工開物云南方酒皆糯米所爲又稻紀云釀酒宜用大師古造粉宜用小師古造西土の稻ハ酒を造るよ堪ざるもの皆稻ありて是よ由て觀ハ西土の糯ハ斯方の稻孫よ準ふしく又和蘭人を地産の鳥類を癒しまる船中糯米の粉を以て餌となし而雄雌の常よ心ハ羸弱て麁ふるもの者ハ斯方の稻米を飼ハ忽ち肥健ニ笑斯方の糯米を飼ハ勢気の盛よ堪ず粘滯して死ふるとゑ又生兒の祝儀よ穭稻と豫知子と産包を添て祐るを古法とせり

是よ由て觀ハ西土の糯ハ斯方の稻孫よ準ふしく又和蘭人を地産の鳥類を癒しまる船中糯米の粉を以て餌となし而雄雌の常よ心ハ羸弱て麁ふるもの者ハ斯方の稻米を飼ハ忽ち肥健ニ笑斯方の糯米を飼ハ勢気の盛よ堪ず粘滯して死ふるとゑ又生兒の祝儀よ穭稻と豫知子と産包を添て祐るを古法とせり

吐火羅よも度感よも當ふしおそし

もあるハ移德島よハ七島と混して其再熟の稻

も初まの種よ多ふもそちるまてを南島の稻ハ唐山乃種のおそくも脆弱みて斯方ハ和よ宜し山海經云交趾國有一歲再熟之稻異物志云交趾稻一歲再種と是ふり圖書編云界稻十月種次年四月熟受仲縄乃志ふくもる新法ふり尚ふ多三收隋書婆登國有月熟之稻歲四熟想ふみ一月よ一種二月一熟ふも殆と含よまふくざくむ夫西土まて酒と造ハ糯ふよりおとふし而斯方ハ其稻を用ふ晉陶淵明彭澤令ふる甚公田よ悉ふ秫稻と植ふるおとふ其稻とを以ふまふくそ夫妻子ふも憂て何とハ飯米あかるふくしと結ふるみと晉書よ載ふり淵明

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1　ガラス使用

於呂加於比稲和名鈔○
帚稽也

野立生稲

稽亦作稭和名鈔引唐韻自生稲
也○稅音稅説文稲今年落來年
自生謂之稅○後漢
光武紀嘉穀嘉作野旅生注寄也不因播種而生ス唐書馬燧傳
大暦四年兵亂後大旱田中生稽禾ノ人頗便之ヲ注稽ハ禾再生
也受一ハ自生ラシ一ハ再生ラシ分ざるよりくらい今按
ま唐書開元十九年揚州奏ス稽生稲二百一十五頃再熟稲
一千八百頃ト山自生ト稲孫ト

なのりくさおあるとろろし

野稲呉志嘉禾三年由
為禾興縣○唐地理志滄州本魯城乾符元
年生野稲水穀十餘頃黄魏飢民就食之ヲ

自生稲唐韻
見上

○通雅揚州生稽稲ヲ自生稲也○
従字彙補今年稲玖來年自生ル也

蕃名ウイルデ・レイスト

おろかおひとい即自生也凡播種ヲ待ちて野生ヨリ

ものを選多く菜ミて稲秧とせり本藩霧
島嶽の自然稲とも云ふ小菜ミよりも
翌日大隅郡横岳邊上して海中より五の新嶼と湧出
始横島絶頂の東南両面より峡
地そこの色白し同一町餘を
遊ぶ大小よ魚あり鯛ふぐ
ふ雨ハ流さぞ沙洲ハ後ハ火の
果して翌日味新雨間より火を發
方數十里又當日の巳午の刻海中の
出又海水黒色ヨ變ス火發ノ徴也
翌望の夜より益熾の候より
漸く是横岳及北隣の地沙灰降積
て堆さと七尺許田畝
川谷悉く埋没し白沙漫々ふ耳
自生し生ず各稲實ヲ結び穎ヲ垂又新嶼ハ止みも播

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

種を拾ぞ松の稚生茅ヶ嫩苗叢茂てそ茅穂と穴米粒を
着て土民採食つるもまた皆田天道人を殺ぶて蓋樵爲
大変新潟湧出らるの續紀所載神護中大隅海中神造
の島及同紀天平寶字八年鷹島信尓村の前ゟ化成三島
せしよりおのゝ僅ゟ三度ゟ一度ゟ今復新嶼と湧出を
ゟ混沌再び来ゟ倶津自生ゟ
化して禾稲と成ゟ竹実変して米粒を結ふよもとゟよ
や竹実米粒とゟ次霧島嶽炎上の時ゟ有り後又肥前國
人ゟ字佐ゟり ゟあり客歳肥の雲仙嶽ゟ大発て灰
て徳中一里許ゟ新島ゟまゝ出来るそゟ中に好ゟり
雑樹叢生ふゟゟ出ゝる一ゟ嶼ゟ但木樹ハ
躅特ゟ多ゟぬ等ゟのまゝ植ゟ
わぎもとおゟゟかしゟの
のいみしゝとゟ條例
よおゟ穴合ゟ奏し嘗て其自生稲の種子ゟて命
して試ゝ植ゟもゟゟ米ゟよおゟ出ゟの植ハおとゟく茫ゟし
て稲ゟし等ゟハ同のゟゟはけやゟき澤ゟれハ語ゟゟ
らんさゟハ上ゟ自生稲てゟふゟのとゟ是ゟ固て好い
ゟるゟ按ゟ續紀和銅六年正月左京職獻稗化爲禾一
茎両穂元年交趾稗草化爲稲大日
本史引畧記曰延長五年四月北山野穀旅生ス人競テ採之

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1　ガラス使用

成形圖說卷之十六終

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1　ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1

ガラス使用